公民館の図書室は　学びの入口・みんなの本棚

図書室月報

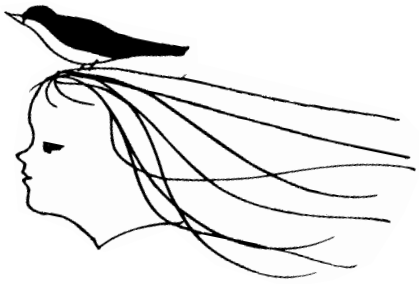
2021 年（令和3年）3 月 5 日
第 694 号

国立市中 1－15－1
TEL.042-572-5141
FAX.042-573-0480
国 立 市 公 民 館

〈 図書室のつどい　参加者の感想 〉

自分が出来る事、やりたい事

～『南極ではたらく―かあちゃん、調理隊員になる―』～



上野　千晴

10月下旬。市役所で一枚のチラシが目に留まった。「南極ではたらく―かあちゃん、調理隊員になる―」これは！と直ぐに公民館へ申し込みをした。講師は、第57次南極地域観測隊調理隊員・渡貫淳子さん。同じ〝かあちゃん〟が南極に行ったという事だけで先ず興味をそそられた。映画にも取り上げられた職業、南極調理隊員。講演当日の高揚感は、未だに余韻が残る程。渡貫さんが南極で体験し得た出来事と価値観は、私の心を踊らせ弾ませ、様々なことを考えさせた。

質疑応答の際、「南極から日本へ早く帰国したかったか否か」の問いに、「迎えの船が近づいてくるのを眺めながら、帰らなきゃいけないんだなと思いました。出来るならずっと居たかったです。」と語った渡貫さんが、とても印象的だった。そう彼女に思わせたのは、氷山での恒例流しそうめん、空を覆うオーロラ、極夜の露天風呂、生態観測の為の釣り、基地の傍までやってくるペンギンたち等々の、楽しい思い出だけではないのだろうなと思った。「楽しい事はこうして撮って記録出来るんです。大変な事は記録する余裕が無いからです。辛い事の方が多かったです。」スクリーンに映る写真とは対照的な言葉に、南極の厳しさは想像に余り有るものだと知った。

水・食料・電気・ゴミ等の制約が有る環境下において、様々な創意工夫が生まれ、既存の価値観は変化したそうだ。30人一堂一所の生活では、大喧嘩もしながら、その人達と一年間暮らしていかなければならない。そこで気付いたのは、「人は一人では生きられない。人に迷惑を掛けずには生きられない。」という事だったそうだ。過酷で人間臭い生活だからこそ、「食事はおなかではなく心を満たす為のものなんですね。」という渡貫さんの言葉は、私の心をも、とても温かくした。食事って本当にとても大切。食べる事は生きる事だと、改めて感じた。

南極はあたりまえではない所。あたりまえの日常＝日本に帰国した後、日常生活にとまどいを感じたという。多過ぎる情報・食べ物・音・光・水。南極には無いもの。あまりの違和感に心を塞いでしまった時期があったそうだ。今の日本の過ぎる豊さの真偽を私に突き付け、問うてきたように感じた。考えなければ。私に何が出来る。自分に過ぎる物は一体何だろうかと。自問自答のきっかけとなった。

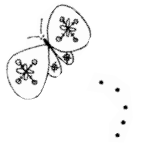
私たちの時間は有限である。一人の人として自分のやりたい事を選択する自由は、この国には無限にある。一人のかあちゃんが新聞記事を見て、調理師免許のある私がやれる事がある！南極へ行きたい！と思って12年の歳月を掛けて夢を叶えたように、私たちには可能性もある。渡貫さんの好きな言葉、「ＮＯの理由よりも、ＹＥＳの可能性を」やりたい事はやってみる。母親だから…女性だから…今じゃないから…。出来ない理由探しばかりでは手に出来ないものがある。そう背中を押された。

夢への近道は夢を口にすること。言葉に出すことで情報がどんどん集まってくる。それが夢を叶えるモチベーションになる。夢を掴み取り、やり切った事への自信を言葉に乗せて、渡貫さんは笑顔で語った。「また南極へ行ってみたいです！」と。

ブッククラブから

小野正嗣著『九年前の祈り』を読む

津田 仁



物語は主人公のさなえが東京で同棲していたカナダ人の夫に去られ、シングルマザーとなり、障がいを持ち、時々ミミズが引きちぎられたように泣く幼い息子、希敏（けびん）を連れて大分県南部の両親が住む町に帰ってきたが、他人と馴染めないでいる。世間体を気にする母、無頓着な父。こうして田舎でも居場所がないまま鬱々とした日々を過ごしている。そうしたある日、母からみっちゃん姉の息子が重い病気にかかり入院していることを聞き、9年前、町主催の国際交流でみっちゃん姉も含め総勢8名で訪れたカナダ旅行の出来事が脳裏に浮かぶ。そしてみっちゃん姉の息子の見舞いに行くため、厄除けの効能があるとされる貝殻を拾いに息子を連れて母の住んでいた文島へ行く。途中、カナダ旅行で起きたことを思い出す。みっちゃん姉が息子の障がいのことで今までずっと心配して来たこと、生まれた時から息子の日記を書き続けていること、旅行仲間が迷子になり皆で見つかるよう教会でお祈りした時、みっちゃん姉の祈りがとても長かったこと。そして同行したメンバーから次のような話を聞く。「みっちゃんの息子はな、表情に乏しくて、喜怒哀楽がようわからん子でなあ……。学校に行けるようになるんじゃろうかって心配し、行けたら行けたで今度は人並みのことができるんじゃろうかって、また心配してのお……。心配は尽きん。運動も勉強も人並み以下じゃけど、病気をせんのだけが取り柄じゃってみっちゃんが言うから、そうよ、そうよ、元気がいちばんじゃねえか、それだけでいいじゃねえかって、わたしらも言うたんよ。いじめられても誰も恨まん、人の悪口は絶対に言わん、わたしらを見たらいつも嬉しそうに挨拶をしてくるる、足の悪い年寄り衆のために代わりに墓参りに行ってやる……そげな子があんたんところの子のほかにどこにおるんか！わたしらは本当にそう思うておるから……。元気じゃったらいいじゃねえか、誰に迷惑をかけるでもなし、って言うたらな、そうかなあ……、そうよなあ、えーこ姉、ってみっちゃんが訊いてくるから、そうよ、そうじゃねえか、ってわたしも言うたんよ。そうじゃねえか、って。そしたら、みっちゃんが泣いてなあ……。泣かんでもいいじゃねえかって言うわたしも泣いておってな、一緒に泣いたんじゃ。そんとき、わたしはみっちゃんが泣くんを初めて見た。あげえ明るい人じゃけどな、さなえちゃん、どこの世界に明るいだけの人がおるんか……。そげな人がおったら、そら、ただの馬鹿じゃ……」私はこの会話に作者の思いが凝縮しているように思えた。やがてさなえはみっちゃん姉が自分と同様に障がいを持つ息子を持ちながらひたすら息子の将来を心配し温かく見守っている姿を改めて想像し、今の自分と重ね合わせ、みっちゃん姉に導かれるように一筋の光を見出すのである。そしてあの九年前のみっちゃん姉の長いながい祈りの意味を今はっきり理解したのである。みっちゃん姉は息子の幸せと同時に障がいを持つすべての者に対して幸せを祈ったに違いない。その祈りは今、9年の時空を超えてさなえの息子への祈りに繋がっているのである。お互いの立場を理解しつつ相手を思いやる。隣人として共に生きてゆく。人々がかつて当然のように振舞って来たこうした営みが崩れようとしている今日、ハンディを背負った人もそうでない人も共に豊かに暮らしていくにはどうしたらいいのか、そのために私たち一人一人は何ができるのか、そんなことを作者は私達に問いかけているように思えた。

新着図書から

〈総記〉

GAFAという悪魔に　ジャック・セゲラ（緑風出版）007
SNS暴力　毎日新聞取材班（毎日新聞出版）007

〈歴史〉

武蔵野事典　武蔵野文化協会編（雄山閣）219
戦火の記憶を追う　琉球新報社編集局編（高文研）219
ドイツ人はなぜヒトラーを選んだのか　ベンジャミン・カーター・ヘット（亜紀書房）234
ポーランドの歴史を知るための55章　渡辺克義編（明石書店）234
Auオードリー・タン　アイリス・チュウ（文藝春秋）289

〈社会科学〉

ヘイトスピーチ攻防の現場　石橋学（社会評論社）316
それでもなおユダヤ人であること　宇田川彩（世界思想社）316
レイシズムとは何か　梁英聖（筑摩書房）316
被疑者取調べと自白　堀田周吾（弘文堂）327
カンボジア自転車プロジェクト　安田勝也（新評論）329
コミュニティの幸福論　桜井政成（明石書店）361
解放しない人びと、解放されない人びと　鈴木英明（東京大学出版会）361
都市危機のアメリカ　矢作弘（岩波書店）361
「高齢ニッポン」をどう捉えるか　浜田陽太郎（勁草書房）364
妻に言えない夫の本音　朝日新聞「父親のモヤモヤ」取材班（朝日新聞出版）367
コンビニは通える引きこもりたち　久世芽亜里（新潮社）367く
ナチス機関誌「女性展望」を読む　桑原ヒサ子（青弓社）367く
マンション防災の新常識　釜石徹（合同フォレスト）369
子ども白書　日本子どもを守る会編（かもがわ出版）369
辺野古に替わる豊かな選択肢　柳澤協二（かもがわ出版）395

〈自然科学〉

あしたの南極学　神沼克伊（青土社）402
身の回りを数学で説明する事典　コリン・ベバリッジ（ニュートンプレス）410
大気環境と植物　伊豆田猛（朝倉書店）471
いつか来る死　糸井重里（マガジンハウス）490
感染症の日本史　磯田道史（文藝春秋）493
「愛」という名のやさしい暴力　斎藤学（扶桑社）493
私たちはどう生きるか　婦人之友社編集部編（婦人之友社）498

〈工業〉

家庭の医学　主婦の友社編（主婦の友社）598

〈産業〉

犬と猫　小林照幸（毎日新聞出版）645
獣害列島　田中淳夫（イースト・プレス）654
ルポトラックドライバー　刈屋大輔（朝日新聞出版）685
地図で読み解くJR中央線沿線　栗原景（三才ブックス）686

〈芸術〉

文化復興1945年　中川右介（朝日新聞出版）702
落語の行間日本語の了見　重金敦之（左右社）779
下山の哲学　竹内洋岳（太郎次郎社エディタス）786

〈文学〉

世界文学へのいざない　小倉孝誠編（新曜社）904
夏目漱石『心』を読み直す　小森陽一（かもがわ出版）910な
古井由吉論　富岡幸一郎（アーツアンドクラフツ）910ふ
愛と性と存在のはなし　赤坂真理（NHK出版）91あ
家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった　岸田奈美（小学館）91き
私の中にいる　黒澤いづみ（講談社）91く
人間の土地へ　小松由佳（集英社インターナショナル）91こ
青空応援団　平了（扶桑社）91た
苦海・浄土・日本　田中優子（集英社）91た
炉辺の風おと　梨木香歩（毎日新聞出版）91な

図書室のつどい

『水墨画入門』
―「モノクロームの世界」への道案内―

お話　島尾 新（あらた）（学習院大学）

ウサギやカエルが戯れる「鳥獣戯画」、言わずと知れた雪舟――。誰もが一度は触れたことのある〝水墨画〟。けれど、その奥深さに分け入るのは何だか敷居が高そうだな、と感じていませんか？

水墨画の〝読む〟入門書を、矢代幸雄の名著『水墨画』から半世紀ぶりに上梓された島尾さんに、東アジア独特の「筆墨の文化」や歴史や思想、作品と技法といった様々な切り口からお話いただきます。墨と、筆と、水と、白い紙から生み出される「モノクロームの世界」への旅をはじめましょう。

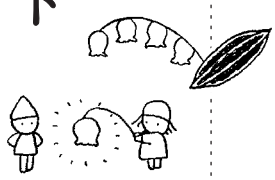
〈島尾さんの本〉『水墨画入門』（岩波書店）、『もっと知りたい雪舟―生涯と作品』（日本美術）ほか多数

とき　3月21日（日）昼2～4時
ところ　公民館　地下ホール
定　員　40名（申込先着順）
申込先　3月9日（火）朝9時～
公民館　☎（572）5141

図書室のつどい

ヒトと進化論
進化論とヒト

お話　更科（さらしな） 功（いさお）（明治大学・立教大学兼任講師）



二足歩行で賢くて……人間は他生物に無い特徴をたくさん持っています。そのため、つい「優れた生き物」として、人間を進化の頂点に置いて考えてしまいます。けれど、二足歩行の人間は、他生物に比べて速く走ることはできません。大きい脳を持つ人間は、他生物よりも大量のエネルギーを消費します……。果たして本当に人間は「優れた生き物」と言えるのでしょうか？

私たち人間はいかに〝ヒト〟になったのか。今回は「進化」というテーマを通して、他生物とのつながりや、「私たち〝ヒト〟が生きる」ということについてお話いただきます。

〈更科さんの本〉『残酷な進化論―なぜ私たちは「不完全」なのか』（ＮＨＫ出版）、『化石の分子生物学―生命進化の謎を解く』（講談社現代新書、講談社科学出版賞受賞）ほか

とき　4月17日(土) 昼2時～4時
ところ　公民館　地下ホール
定　員　40名(申込先着順)
申込先　3月18日(木)朝9時～
　　公民館☎(572)5141

＊発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。
また、マスクの着用をお願いします。

〈私の本棚から　第6回〉

鷲田清一著『「自由」のすきま』

石井 翔梧

他者が生み出す言葉や表現に出会うことによって救われることがある。様々な言葉や表現を知ることは、自分の想いや感情を他者に伝える手段を得ること、自分が抱えるモヤモヤを別の角度から捉え直す糸口を学ぶこと、他者への想像力を働かせることにつながると思う。本エッセイでは、哲学者・鷲田清一が織り成す様々な言葉や表現に出会うことができる。とりわけ、人が時折直面する、決して気持ち良くない場面や、その場面に遭遇した際の感情の言語化が鋭い。こんな文章が書けたらなぁと思う。

本エッセイを読む中で、とりわけ印象に残ったのは、「聴く」という行為に関する話の数々だ。内容をいくつか紹介したい。本書の中に「聴く側」と「聴いてもらう側」という表現が出てくる。鷲田は「聴く」ことを主体的なものとして捉えている。そして聴く側にも技法が必要だと言う。例えば聴き方について。普通、「聴く」というと、話す相手に関心を持っていることが伝わるような聴き方を心がける必要があると考えがちだ。（「聴」という漢字には、目、耳、心が入っている。）もちろん、このような姿勢も大切なことなのだが、聴くことを生業としてる方々は、「聴いてもらう側」の吐き出しに寄り添う様々な技法を持っている。看護師さんは、患者の話を聞く際、蒲団の上に手を当てることがあるという。身体で聴くということだろうか。また、居酒屋の店主やウォーター・ビジネスを生業とする人たちは、あえて聴いている感を出さずに聴くワザを持っている。前者は調理や後片付けをしつつ、話を耳に入れながら、合間合間に変化球を投げ返す。後者は、あえて話者の話を逸らしたり、からかったりする。しかし、突き放しながらも、最後まで話につきあうことがミソなのだという。「聴く」という行為の奥深さ、難しさについて考えさせられる。そういえば、私が大学でお世話になった、ある教授は、タクシーに乗った際に運転手との雑談を楽しむと言っていた。タクシーの運転手と乗客は同じ方向を向いている。顔を合わさないからこそ、吐き出しやすいことがあるのかもしれない。

鷲田の言論は、一貫して「しなやかさ」も含んでいると思う。他者や世論に絡め取られない「しなやかさ」であり、歪な自分自身に対して大らかであるという「しなやかさ」である。日常生活を過ごす中で、なんとも言えないモヤモヤとした感情が募ってきた時に、また戻ってきたい1冊だ。（角川学芸出版）

係から

今回で石井さんの「私の本棚から」は終了です。本当にありがとうございました。

2月24日からくにたち電子図書館が始まりました。詳しくはくにたち図書館ホームページをご覧ください。